浦幌炭砿覚書

円子紳一

1．はじめに　浦幌市街から道々本別―浦幌線を北上して、常室小学校前で右折。左右の山が迫って来て砂防ダムを過ぎると、もう5km位で旧浦幌炭砿跡地に着く。

浦幌村50年沿革史（1949年発行）によると「浦幌炭礦はもと古河鑛業株式會社の所有であったが、大正二年（1913）平林基雄氏の手に移り、大正六年末（1917）より財界の好況に依り事業はその緒についたのであるが、時に起伏があった。昭和八年八月（1933）大和礦業株式会社に依って開發され、更に昭和十一年十月（1936）三菱雄別礦業所の經營となり現在に至っている。」とある。

1944年（昭和19）には、非常増産緊急措置により休山となり、終戦後の1947年（昭和22）に復興に着手され、翌23年から採炭が再開された。しかし、1954年（昭和29）には炭界の不況により閉山。1967年（昭和42）には全住民が退去して無人の街となった。

現在でも確認できるのは、ブロック造りの2階建てアパート3棟、尺浦通洞跡、山際にポッカリと口を開ける排気坑などである。

筆者は、浦幌炭砿最盛期の写真を一部発見することができたので、ここに記録として残して置きたいと考えた次第である。

2．協和会館（PL．1　工藤春雄氏所蔵）

協和会館は、従業員の娯楽施設として1939年(昭和14）3月に落成した。完成後は、炭山の唯一の娯楽施設として映画や地元住民の各種の催しでにぎわった。

浦幌町史（1971年発行）の459ページにも協和会館の写真が掲載されているが、建物中央の上部（「協和會舘」の文字の上）にあるマークが、PL．1では三菱のマークであるのに、町史では雄別砿業所のマークに変っている。また、町史では正面玄関の上部にある三枚続きの窓の手前に、看板の様なものがあり、前庭には照明灯があるなど、いくつかの相異を見ることができる。

3．太平坑入口に立つ炭砿夫（PL．2　工藤礼子氏所蔵）

1951年（昭和26）頃の炭砿夫の姿である。坑口に標縄（しめなわ）が飾られているので、正月に写したものと思われる。顔などに炭じんの付着が見られないので入坑前か。

4．畜音機を前に記念撮影（PL．3　工藤春雄氏所蔵）

1939年（昭和14）頃の炭砿住宅に住む家族。念願の畜音機を購入して、家族そろっての記念撮影。部屋の中には、タンス・丸テーブルしか見られない。

5．山神社（PL．4　円子ミヨ氏所蔵）

1942年（昭和17）産報青年隊で勤労奉仕の後に撮影したもの。左側に写っているのが山神社。現在では後片も残っていないが、境内に建立された復興碑（1947）だけがその位置を示している。

なお、御神体は浦幌神社に奉納され、建物は本町にある太子堂になっているとのことである。

6．おわりに　ここに紹介した写真は、浦幌炭砿が隆盛をきわめた1942年（昭和17）頃と復興後のものである。個人で所有しているだけでは、いつとはなく散逸してしまう恐れがあるので、後藤秀彦氏の勧めもあり、本文の起稿となった。

浦幌村50年沿革史の第40図には、双運～尺別間のトロッコ軌道付近から写したと思われる炭住街が掲載されている。同沿革史編集委員であった間

PL．1　協和会館

宮不二雄氏が、1948年（昭和23）8月3日に双運を訪問したときに撮影したものの1枚だと思われる。（同沿革史の史料探訪記による）

まだまだ人目にふれない写真が多数あるものと思われる。浦幌炭砿は、十勝で唯一の炭砿であり、往時の記録を探ることも意義深いことと思う。

PL. 3　蓄音機を前に記念撮影

引　用　文　献

浦幌町史編さん委員会（1971）「浦幌町史」　浦幌

谷向　繁（1979）「浦幌炭砿の街並み形成について」「浦幌町郷土博物館報」14　浦幌

間宮不二雄（1949）「浦幌村五十年沿革史」　浦幌

PL. 2　太平坑入口に立つ炭砿夫

PL. 4　山　神　社

1984年3月15日　印　刷
1984年3月20日　発　行
編　集　後　藤　秀　彦
発行責任者　家　村　克　行
発行所　浦幌町郷土博物館（089－56）
北海道十勝郡浦幌町字東山町23番地
印刷所　大同出版紙業株式会社（080）
北海道帯広市西7条南6丁目